

第2章 やって来たトナトン王国

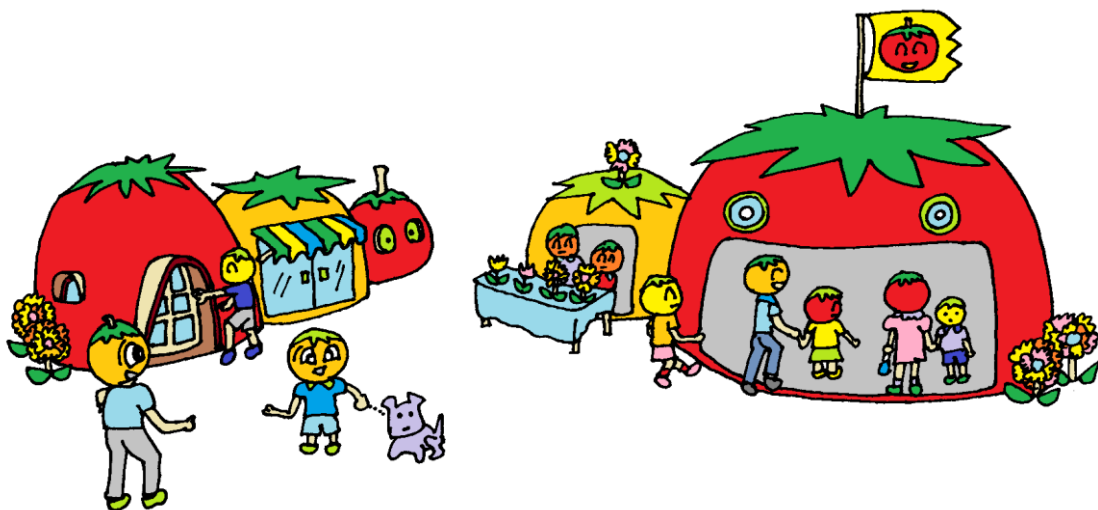
トナトンの街並み

「きれいな街並みね」

「そうね、エイミー。フレンズ以外は特に私たちと変わらないわね」

「おいら、少しおなかがすいてきたな」

この世界ではエネルギーは自然に満たされるのですが、おいしそうな果物を見るとおなかがすく感じになるのでしょう。



「ほんとうに、おいしそうな果物ね、バーバラ」

「でも、ほら近づいてみると何か変わってるわね」

「ほんとうだ。まるでプラスチックのおもちゃの野菜みたいだ」

『でもちゃんとした生き物なのよ。いろいろと案内するトナ』

トナが3人にいいました。

『いろいろな果物が多いのよね、トナトンは。気候の関係から果物とお花の国ね。私たち3国の中では一番きれいでうらやましいポン』

オレンシア合衆国から来ているデコがいました。オレンシアはトナトンから南東にいった島国です。気候はトナトンよりさらに暖かく、島国のため海の幸にも恵まれています。

『トナトンは果物とお花の国トナ』

『デコのオレンシアは南国のお魚の国ポン』

トナとデコはお互いの顔を見ていました。



「ほんとうだわ。ここに
あるお花は色がきれいな
だけでなく、いろいろな変わった姿をしてるわね、エイミー」

「そうね。極彩色のお花ね。くねくねしてるのもあるわね」

「だって、ほら、こっちは動いているぜ。おもちゃであったよね、音楽に合わせて踊る花ってのが」

『・・・どうぞ、女神様・・・』

突然花屋から出てきたご主人と思われるやはりトマトの顔をした人が、バーバラに花の冠を差し出しました。

「ええ、わたしにくれるの」

『かぶってみて』

トナがそういうので、バーバラはご主人から花の冠を受け取ると、自分の頭の上にかぶせました。

「どう、似合うかしら、トミー？」

冠には緑の葉で全体が整えられ、赤、黄、白、ピンクの小さな花がちりばめられていました。

「どうしておいらに聞くのさ？」

「だってあんたはけらいだから・・・」

「なんだって？・・・」

「じょうだん、じょうだんだわさ」

『この冠をつけているときっといいことがあるトナ』



トナがそういいましたが、バーバラは頭が重くなってきたので、手にとって抱えることにしました。

『でもほんとうにいざと言うときは役に立つわよ。後でエイミーとトミーにもあげるから持って帰って』

デコも『きっといいことあるポン』と、同じことをいいました。そのとき突然周りが暗くなりました。部屋の明かりを1段階か2段階落とした程度なのですが、全体が少し暗くなりました。

「あら少し周りが暗くなったわ」

エイミーがいました。

「おいら今、気がついたんだけど、そういえば影がないんだよね、この世界には」

「そうね、何か私たちの世界とはやっぱり違うわね」

『・・・トナ・・・』

『・・・ポン・・・』

トナとデコはなにやら自分たちの言葉で話をしているようです。なにか音は出ているのですが、なにを話しているのかは、エイミーたちにはわかりません。

『ごめんトナ』

トナがいました。

「どうしたの？」

『詳しいことはまた話すけど、最近お天気がおかしいトナ』

デコも3人の方を向いていました。

「でもさ、デコ。さっき晴れていたときも影ができないんだよね。お陽様はどこにいるの？」

『それもだんだんお話しするトナ』

トナがいました。

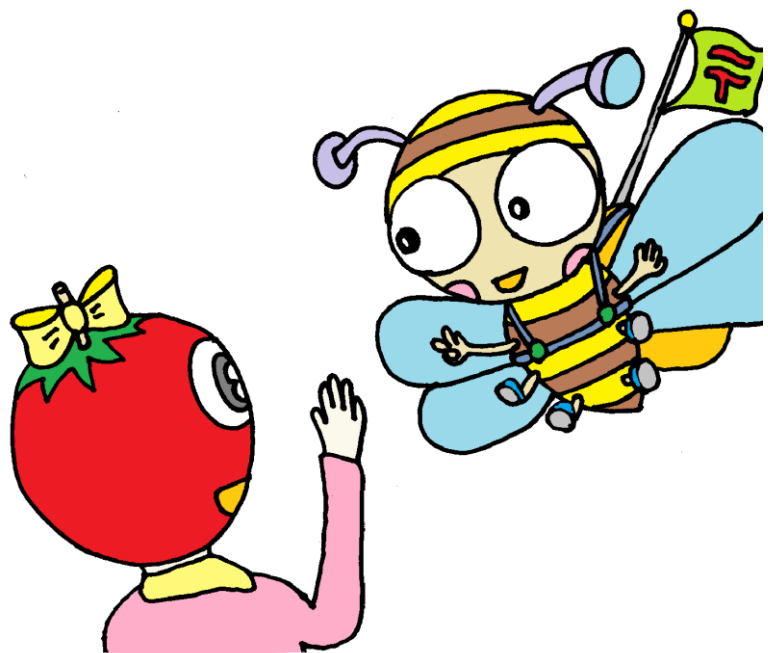
『おはサヤ～～～』

だれかが声をかけました。

『あっ、サーヤ、おはようトナ』

『おはようポン』

トナとデコが声のした方に顔を向けて返事



をしました。

『人間の世界から来た神様は君たちのことサーヤ？』

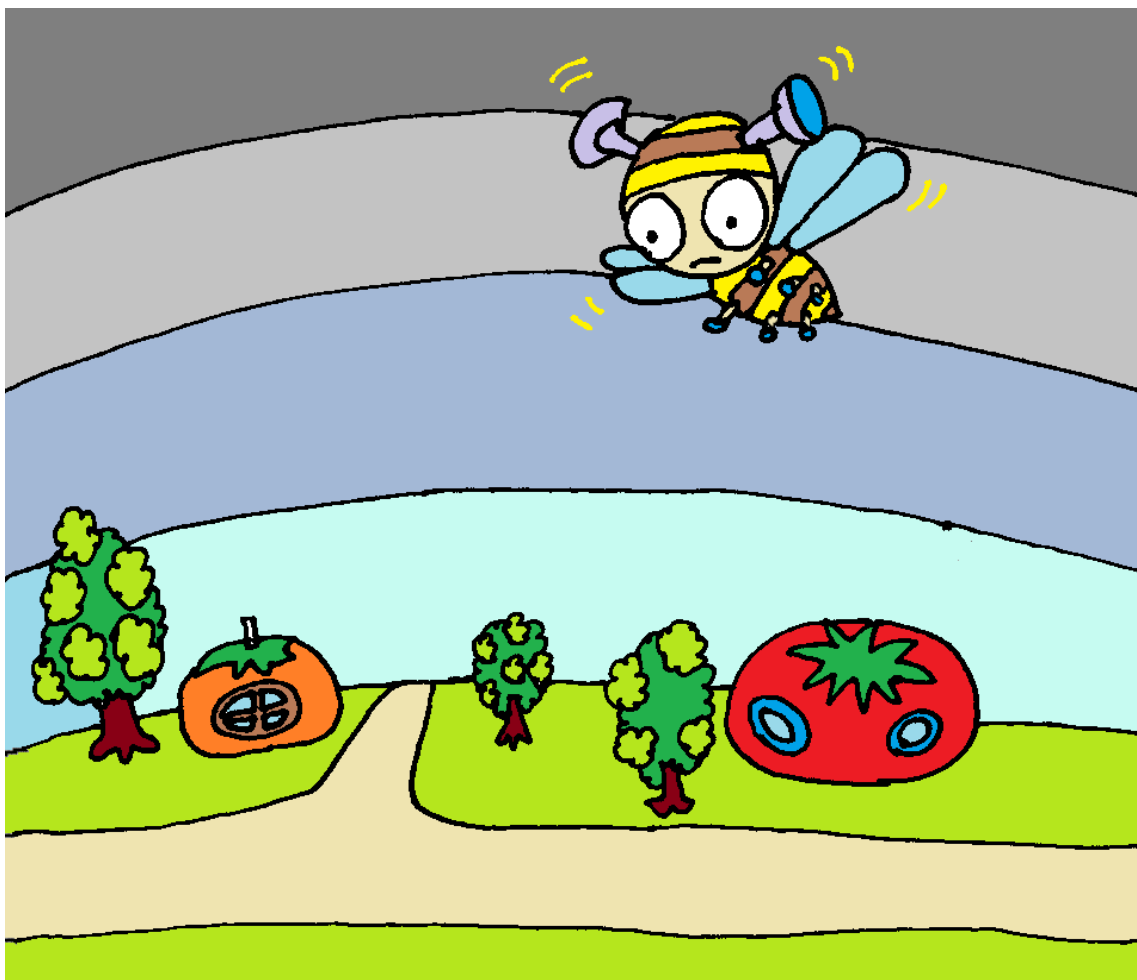
『サーヤの耳にはうわさはすぐ届くトナ』

トナがいました。

異変の始まり

『地上はいいけど空はもっと大変サーヤ。上に行くほど影響が大きいサーヤ』

空から降りてきてバーバラの目の前で飛びながらサーヤがいました。



『ボクはサーヤっていうサーヤ。ミツバチのサーヤ。郵便屋っス』

「こ、こんにちわ。わたしはバーバラ。こっちは友だちのエイミーと、けらいのトミーよ」

「こんにちわ、あたいはエイミーよ」

「なんでおいらだけがけらいになるの？」

トミーはバーバラに向かって舌を出し、バーバラも舌を出して返しました。

「ここにいると違和感ないけど、おいらたちの世界のミツバチの何倍もあるじゃん。ずいぶん大きいよね。扇風機みたいに風がくるよ。音もするしね」

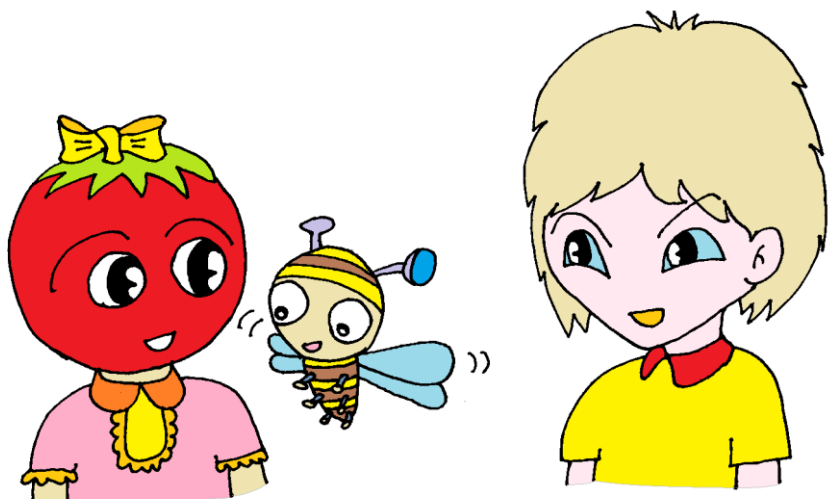
トミーがサーヤに向かっていいました。サーヤは顔が野球のボールくらいあり、羽を広げると50センチリーブス（1リーブスは約1メートル）くらいになります。

『じゃあトナ姫の頭を借りるサーヤ』

そうってサーヤはトナの頭の上に止まり羽を休めました。

『それで何かわかってきたの、サーヤ』

『このように暗くなる回数が増えてきた。このときのエネルギーは約半分になっているはずなんだ』



「いつもエネルギーとかなんかいつてるけど・・・」

バーバラがサーヤにたずねました。

『女神さん、そうなんス。ミーたちはエネルギーで生きてるんス。エネルギーがおかしいので異変が起こってるサーヤ』

『そう、サーヤの言うとおりに、異変が始まったのよ。それを防ぐためにあなたを探し出し、ここに連れて来たってことなの』

トナがバーバラ、エイミー、トミーの顔を見ていました。

「んなこといってもあれはレタ君が自分でかって（勝手）・・・イテテテ。なにすんだよ、バーバラ・・・」

「男のあれは・・・？」

トミーがしゃべりそうになったのをバーバラがかろうじて止めました。

「そ、そう。レタ君が、じ、自分で飼っていたニワトリを追いかけて行って、予言のありかを見つけたんだよね・・・たしか・・・」

「その予言のあった林の奥のトンネルを
通ってトナさんとデコさんがバーバラと
あたしたちを見つけたのね」

エイミーもトミーをフォローしていました。

「だからその女神さんがさっそくこの問題を解決しないといけないよね・・・」

トミーがバーバラの顔を見て舌を出していました。



「けらいのあんたが解決するものよっ」

「なんでそうなるの・・・結局・・・」

「で女神は見つかったけど、その後はどうなるの？」

エイミーがバーバラの顔をチラッと見て、トナにたずねました。

『その後の予言も見つかったってレタがいていたわ』

「いいのかな？レタ君、そんなこといって・・・」

『オーイ、みんなでボクのうわさをしていたかニ？』

そこへちょうどそのレタがやってきました。周りがさらに暗くなったかと思って上を見ると、レタチンにやってきたときのビッグドラゴンフライが飛んでいました。2匹のビッグドラゴンフライは着地すると羽をたたんで1匹がいました。

『やあ、スカイブルーだよ』

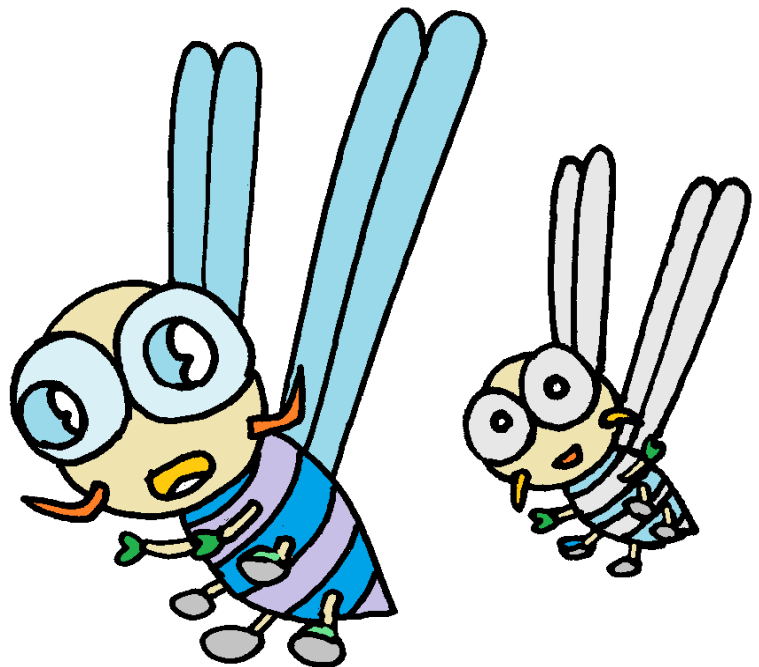
「トナとエイミーとバーバラが乗った隊長だね」

『ボクはブルーシルバーってんだ』

「よく似た名でややこしいわね」

バーバラがトナの顔を見ていました。

「で、レタさん、何しに来たの」



エイミーが尋ねました。

『女神様に空から様子を見てもらおうと、スカイブルー隊長に頼んできてもらったのさ』

レタが答えました。そこでスカイブルー隊長の背中に、トナとバーバラとエイミーが、ブルーシルバーの背中にデコとトミーとレタがまたがりました。羽を横に広げると羽ばたくこともなく、ふわっと3リーブス（約3メートル）ほど上に浮き上がりました。2匹のビッグドラゴンフライは羽をひとかきするとそのまま一気に空高く上昇しました。

「い、いつもながらこれってすごいや」

トミーは後ろのレタを見ていました。

『空から見ると異変のようすがよくわかるトナ』

トナは後ろのバーバラとエイミーを見ていました。まださっきから空は少し曇ったままです。曇ったというより薄暗いのです。

『ほらあそこはお花畑だけど、この季節になってもまだお花が咲いていないトナ』

「どんなお花が咲くのかしら」

バーバラがトナにたずねました。

『春のエネルギーは色のエネルギーよ。何もなかった色が赤や黄色やオレンジ色になっていっぱいお花が咲かなくてはいけないトナ』

「いつもよりお花が少ないってことなのね」

『もうこのあたりはいっぱいのお花でないといけないトナ』

そういつて2匹のビッグドラゴンフライはお花畑の上で2回、3回と旋回をしました。

「このままだとどうなるのかな？」

トミーが振り向いてレタに質問しました。

『夏になっても、お花がお歌を歌わないんだらうニ』

「花が歌を歌うの？」

『そうだよ。そっちの花は歌を歌わないのかニ？』

「う、歌わないよ、
だって花は花だよ。
歌を歌うのは鳥か
な？」

『どう、わかってく
れたかしら？もうお
花が咲いていないと
いけないのにおかし
なことになっている
トナ』



2匹のビッグドラゴンフライに乗った6人はこうしてトナトン王国を空からながめ、赤やオレンジや黄色のドームの建物のある場所に戻ってきました。

『スカイブルー隊長、ありがとう』

トナとデコがお礼をいいました。

『ブルーシルバーもごくろうさん』

レタがもう1匹にお礼をいいました。2匹は3メートルほど浮いたかと思うと、1回羽を羽ばたいたかと思うと、あっという間に空高く上昇し、すぐに見えなくなりました。

フレンズの法律

エイミー、バーバラ、トミーの3人はここに来た時に、はじめに通されたオレンジのドームの建物で休んでいます。

「あれだけ動いているのにおなかがすかないわね、エイミー」

「そうね、でも習慣で何か飲みたくなってきたわね」

「おいらもなんかのどが渴いた気がするよ」

そこへトナとデコがメロンのような果物を持って来ました。

『のどが渴いたでしょう。これを飲むといいトナ』

トナがそれを差し出しました。

「あれ、この世界じゃおなかはすかないって話じゃないの？」

トミーが聞きました。

『おなかはすかないけど、のどは渴くものよ。水分はエネルギーとは別に必要なのよ』

「半分便利で半分便利じゃないのね」

バーバラが不思議そうな顔をしていました。

「ゴクゴクゴク・・・おいしい！」



3人はそのおいしさに思わず同時に声が出てしまいました。

「なんかこう、メロンとパイナップルとバナナを足して3で割ったような味だね」

トミーがわかっているのか、わけのわからないことをいいました。

『よかったわ、女神さんがおいしいって言ってくれて』

トナがそういいましたが、バーバラが首を横に振っていいました。

「あたし女神なんかじゃなくて・・・」

『いいのよ、わかっているわ、バーバラ。さっきトミーに聞いたわ』

「あんたまたしゃべったの？レタ君との男の約束じゃなかったの？」

「だ、だって。レタ君が予言の続きを今度は巻物に書いているのを見て、おもわずしゃべっちまったんだ」

『でもトミー君のおかげで、もううそをつかなくてもいいだニ』

レタもトナとデコを見て少しばつが悪そうにいいました。

「じゃあわたしたちもこれで役目は終わったって事なのね」

バーバラは少しほっとした表情でいいました。

『ところがそうでなくて、おおありなんだニ』

レタがトナとデコを見ていいました。



『実はボクが予言を書いたのも半分はきちんと調べて書いたことなんだ。ボクの国レタチンは科学が進んでいるから、別の世界に君たちヒューマンがいるってことを知っていたんだニ』

「あの不思議な雑木林のトンネルのことも知っていたの？」

バーバラがたずねました。

『昔から知っていたよ。教科書にも書いてあるんだニ』

「教科書って？あなたたちは何歳なの？この世界ってなんなの？」

エイミーもバーバラの顔を見ながらいいました。

『トナたちは何歳って言われても年なんてないから知らないわよ、ねっ、デコ』

『そう。ずっとここにいるし、どうして生まれたかも知らないポン』

「だってお父さんもお母さんもいるじゃない。立派な王冠をつけていたわね」

『あれは教科書にそう書いてあったからそうしてんだニ。ここは教科書に書いてあったからトナトン王国にしたんだ』

「その教科書っていったい何なの？どういうものかしら？」

『これだよ』



そういつレタがドームの壁を指さしました。すると壁がテレビ画面のようになり、そこに何か文字が映し出されました。



『これが、わたしたちの教科書なのよ』

そうトナが言うとディスプレイは文字や写真やいろいろな情報を表示していきました。表紙が映し出され、そこには出版会社らしい名前が載っていました。

「フルタニア百科事典？これってよく売りに来るどこかの百科事典じゃないの？」

「そうだし、この文字も英語みたいだよ。君たち英語を使うのかい？」

『これがわたしたちの教科書トナ』

「つまりこの百科事典を見て、いろいろと国の決まりごとができたってことかしら？」

エイミーが頭の回転を働かせていいました。

『この教科書に王様の国や合衆国が載っていて、トナたちは王国が
いいっていったんだ。オレッチたちは連邦で、デコたちは合衆国が
いいって。だからそうなったんだ』

「・・・す、すごい決め方ねえ・・・」

バーバラがため息まじりにいいました。

「じゃあさっきのお父さんやお母さんは誰なの？」

エイミーが質問します。

『あれは順番に王様をやってるんだよ。お父さんなんていないよ。
だって教科書にはオラッチたちのことは書いてないんだ』

「わ、わかったわ。というか、わからないんだけど・・・。それで、
もうひとつの質問だけど、年は知らないってどういうことなの？」

バーバラもあきらめて年についての質問をしました。

『オレッチに良く似てるのが教科書のベジブルのところに載ってい
るだニ。でもそれは動かないしちょっと違うんだ。年も書いていな
いし、情報がなにもないんだニ』

「じゃあ別のいい方するけど、あなたは
もう何年ここにいるのかしら？」

エイミーが質問しました。

『トナは正確には知らないわ、そんなこ
と、デコは知ってる？』

『デコも知らないポン』

『オレッチは大体 300 年くらいここにいると思うニ』



「さ、300年？」

トミーがびっくりして大きな声をあげました。

『トナは200年、デコもそのくらいだニ』

『そういうことってレタがよく知っているトナ』

「なんだかトミーの話より頭が痛くなりそうね」

バーバラが首を横に振りながらいいました。

「おいらも頭が痛くなりそう」

「まあ現実にもうとしたらそうなのね。だからあなたたちはどうしてここに生まれたかは知らないけど、ここにいてこうして生きている。その教科書は誰が書いたかは知らないけれど、それがフレンズの法律みたいなものなのね、きっと」

「さすが、エイミーは頭の回転が速いわね」

「じゃあトナさんとかデコさんってさんづけにしなくちゃね」

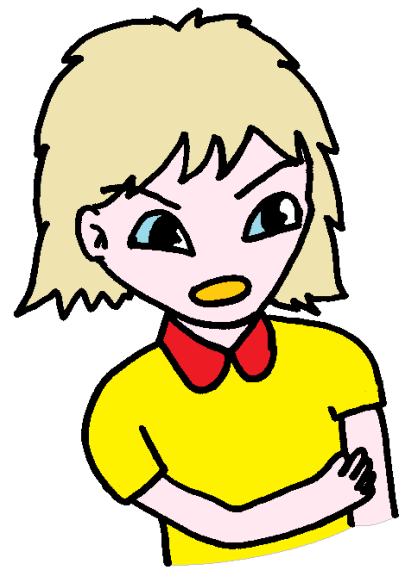
「年上だもんね」

「年上すぎるし・・・」

四季のエネルギー

「順番に整理しましょ。予言通り女神というか、あたいたちが来た。その後は今レタ君が考えている。で、あたいたちはなにをするの？」

エイミーがひとりつぶやきました。



「だってここに来て2日目でなんにもわからないけど、王様が王様でなかったり、おなかが減らなかったり、いったいこの世界は何なのかしらね」

バーバラも頭を少しかくようにしていいました。

「それに年が200歳だの300歳だの、とんでもない年だし。みんなはどこから生まれたか知らないときてるし・・・」

トミーも誰に質問するというわけでもなく頭をかいています。

『トナたちもどうしてここにいるのか、わからないのトナ。トナたちが生まれたころ、この教科書だけが残っていたトナ』

トナがデコの顔を見ていいました。

「なんとも不思議な世界に来てしまったのね、バーバラ」

「まだ夢を見ているみたいだけど、夢ではなさそうだし・・・」

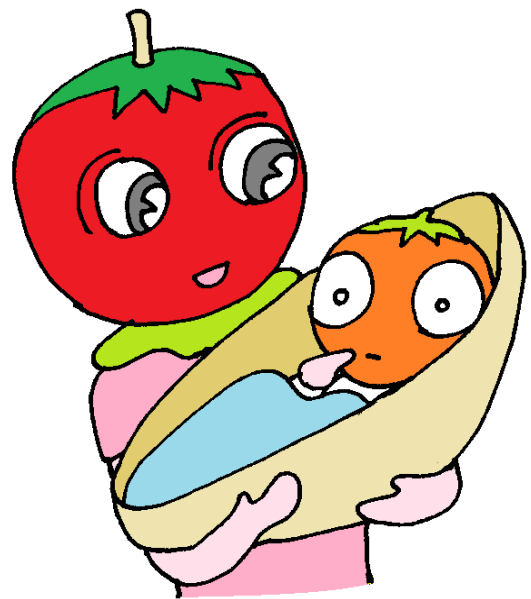
「帰ったらまだ土曜日だっていうし・・・」

「とにかくもう少し詳しく説明して頂戴」

エイミーが改めてトナたちの顔を順番に見ていいました。

『そうねえ、何から説明したらいいトナ、デコ？』

『まずそもそもデコたちが生まれる前からこの世界はあって、今日と同じような生活だったと聞いているポン、ね、トナ』



『そうなんだよ。オラッチたちがこの社会を作ったんじゃなくて、はじめにこの社会があってオラッチたちが生まれてきたんだニ』

「あなたたちの人口はどのくらいなのかしら？」

エイミーがたずねました。

『人口って何？デコ、知ってるトナ？』

『知らないポン。なにそれ？』

『教科書によると人口ってのはオラッチたちのように世の中で中心になる人の数ってことだニ』

「そう、あなたたちの数のことよ」

エイミーがいました。

『オラッチたちはフレンズって呼ばれてんだ。そうインプットされているニ』

『そうねえ、わたしたちフレンズはトナトンでも 500 人くらいいるわよ。オレンシアはもっといるわね。その倍くらいよ。レタチンは少ないわね 200 人くらいかな。ねえ、レタ？』

『そうだね。四季のエネルギーの状態で変化するんだけど、1年に1人か2年に1人くらい生まれてくるみたいだニ』

「なんかこう複雑そうなんだけど、意外とシンプルなんだね」

トミーがいました。



『春は色（彩）のエネルギー。夏は音（楽）のエネルギー。秋は知（識）のエネルギー。そして冬にそのエネルギーが愛となって生（命）を育むのよ。これがこの世界にはあったのよ、ねっ、デコ』

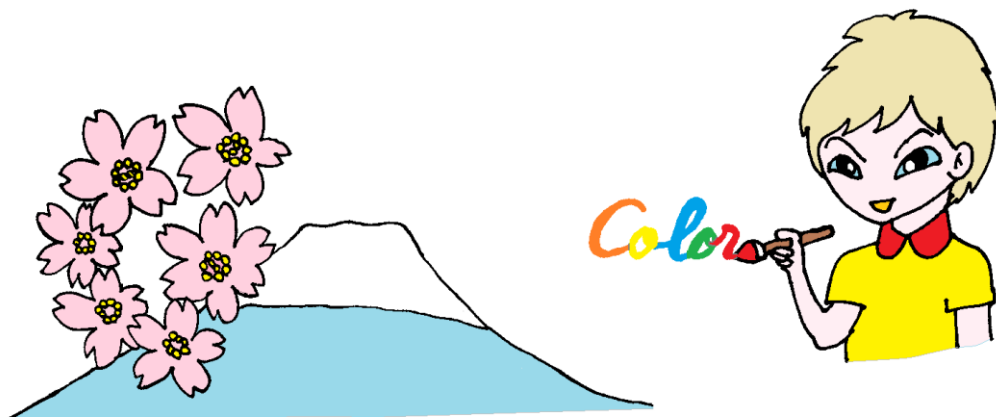
「春のエネルギー？」

『そう。バーバラには春の女神になってもらおうかしらトナ？』

バーバラの声にトナがいました。

「春のエネルギーって、わたしは何をするのかしら？」

『春はいろいろと色が付いて行く季節だポン。王国だけでなくトナも元気がないので、バーバラがトナの絵を描いてあげると元気になるポン』



「でも絵ってへたなんだよね、わたしは・・・」

「バーバラは料理以外、得意なものがないよね」

トミーが少しからかっていました。

『だいじょうぶポン。うまい人より少し下手な人の方が効果があるポン。フレンズでは春になると自分の目標を立てていっぱい絵を描くポン。後でいいものをプレゼントするポン』

「ふう～～ん。で、夏のエネルギーは誰？」

エイミーがたずねました。

『そりゃあ歌の好きなエイミーがぴったしトナ』

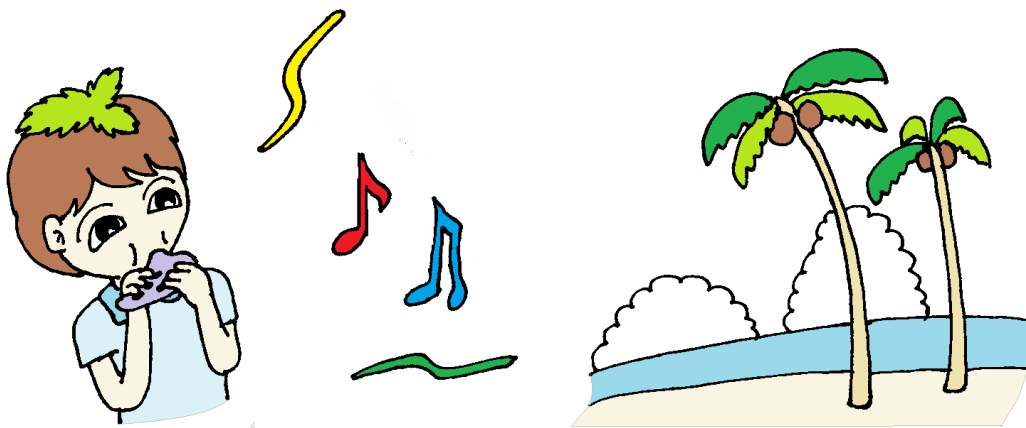
「あたいが歌でも歌うの？」

『エイミーにも後で素敵なものをあげるトナ』

「春に描いた絵をいっぱい飾って、それを見ながら音楽をするトナ。
どんどんと力がみなぎって来るトナ」

「フレンズの国では季節ごとに必要なエネルギーがるってことかしら？夏の音楽ならまかしてね」

「エイミーのお家は海が見えるし、ぴったりだね」



トミーも思わず笑顔になっていました。

「で・・・順番からいって秋の知のエネルギーは、ま、まさかのおいらじゃないよね」

『もちろん知のエネルギーはトミーの願するわ』

「ええ～～！トミーが知のエネルギーだなんて・・・」

エイミーとバーバラがお互いの顔を見合って驚きました。

「えっへん、やっぱ、そうだったよ」

『そう、バーバラのときも絵がへたな方がいいように、今度も頭が悪い方が効果がいいトナ。ねっ、デコ？』

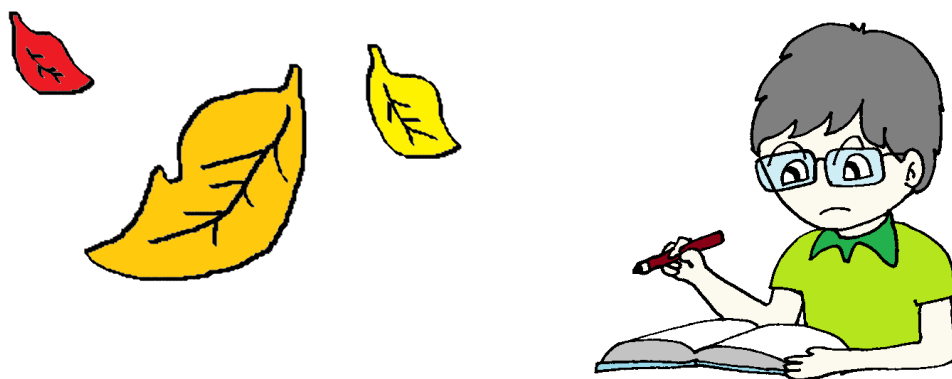
「なにかあると思ったわね、トミー」

「エイミー以外はいつもこうだよ・・・」

「確かにエイミーは音楽は得意だしね」

『バーバラ、そうじゃないポン。頭がいいってことは重要じゃないわ。一生懸命するかどうかなのポン。トミーは何事にも一生懸命だからポン』

「そうだよね。おいら絶対にあきらめることはしないもんね」



「そりゃ、そうだ。作文を授業が終わってからも書いていたもんね」

バーバラがトミーの顔を見て少し感心した様子でいいました。

「それで、最後の冬はどうなるのかしら？」

エイミーがたずねました。

『そしてそれが全部揃うと初めて生命のエネルギーになるポン。全部揃わないと新しいフレンズは生まれずに死んでしまうの。でも実際はわたしたちは何にもわからないのよ』

『エネルギーはすべての源ってわけだけど、そのエネルギーのようすがおかしいトナ。ついこの間もこうだったトナ』

トナは少し深刻そうにいました。1ヶ月ほど前のトナトン王国はたいへんなことになっていました。

【異常トナトンっス。道を開けてくださいっス】

数えきれないトナトンが、ハスの担架に乗せられて入ってきました。王国は1カ月ほど前に冬が終わり、温暖な4月の新緑の季節を迎えていた。しかしその冬のエネルギーに異変が起こり、生命となるはずのトナトンに異常が発生してしまったのです。その結果そのトナトンの中からは1人の生命も生まれないという前代未聞の事態になってしまったのです。原因の究明に高度な科学のレタチン連邦からレタがやってきたというわけです。



「なんであんな予言書を書いたの？」

バーバラがたずねました。

『教科書にトマトのお姫様を救う金色の髪の青い目をした女性の話が紹介されていたんだ。これだと思ったんだニ』

「で、それなんていう話なの？」

『トマトの騎士っていうトナ』

『フルタニア百科事典に紹介されているヤパンというアニメの国の有名な実話だポン』



「・・・そ、そう・・・」

『とにかくその話のあったヒューマンワールドに行ってみようって言うので、スカイブルー隊長に頼んで連れて行ってもらったのよ。ね、デコ』

『そう。でも大変だったわ。向こうはエネルギーが不純っていうか、息ができなくて声が出なかったの、ね、トナ。』

『そうまるでゴミだめだったわ、デコ』

「・・・そ、そう・・・」

『そこであの噴水のところではじめにエイミーと会ったんだけど、エイミーは髪と瞳が黒いから帰って行ったトナ』

「だけど結局その青い瞳は今後どうするのかな、レタ君」

『それはまた教科書で探すことにするニ。トミーも手伝ってニ』

「オ、オーケー！」

『でもひとつだけわかったことはあなたたちの世界の影響を受けていることは確かなのよ。ね、デコ』

『そう。エネルギーがにごっていて、スカイブルー隊長も怖がって外には出なかったわ。ね、トナ』

『そう。あんな汚いところを歩いたの初めてトナ。ね、デコ』

「・・・そ、そう・・・」

「・・・エイミー、バーバラ・・・、トナさんっておとなしそうな顔をしてて、結構はっきり言うよね・・・」

『今は春。色のエネルギーが必要なの。ねバーバラ、エイミー、お願いだから助けてね』

「そ、そりゃあ、あたしたちにできることならね。ね、エイミー」

「そ、そうだわね」

「お花に色がつかなければ、夏にお花は歌を歌わなくなるんだね。おいらは協力するよ。レタ君とは男同士だもんね」

ほんとうにヒューマンの世界が影響しているのか？もしそうだとしたら何の原因で影響しているのか？それを突き止めるためにトナトン王国、レタチン連邦、オレンシア合衆国ではフレンズが集まって、対策会議が開かれました。レタチン連邦からはレタをはじめ年が300歳から250歳くらいまでの数人が、トナトン王国とオレンシア合衆国からは200歳前後のフレンズが数人ずつ同席をしました。大きな木のほこらを前に10数名が集まり、教科書であるフルタニア百科事典を広げて議論が始まりました。

